

学生企画ワークショップ

「動物を仲間分けしよう！」報告レポート

1. はじめに 一実施の経緯一

このワークショップ（以下WS）は、平成24年度前期に実施された京都大学全学共通科目「博物館教育論」の授業の中で私たち受講学生が企画したものである。「博物館教育論」は京都大学総合博物館の大野照文先生が担当された授業で、博物館で起こる『学び』とその実情について、時折WS実践を交えながら私たちは多角的に学習することができた。この授業の最後に、現在行われている企画展「陸上脊椎動物の多様性と進化」を来館者により楽しんでもらう学習ツールを作成するというグループ課題が出され、私たちはWSの作成と授業における発表を行った。前期授業終了後、自分たちが作成したWSを実際の来館者を対象に実践してみたいという声が上がリ、博物館の協力のもと今回のWSの実現に至った。

2. WSの概要

「動物を仲間分けしよう！」というテーマで行ったWSは、子どもたちに企画展で展示されている動物たちを自分たちで論理的に考えて分類することで、分類学の楽しさを体験してもらいたいという目的のもと、京都大学総合博物館の企画展関連WSとして実施した。WSの内容は、動物カード（表は動物の写真、裏は頭蓋骨の写真）を用いた動物の仲間分けゲームで、子供たちによる観察と話し合いを通して、11種類の動物を4種類のグループ（げっ歯目、食肉目、偶蹄目、霊長目）に仲間分けしていくものである。チームに分けによるアイスブレイクの後、動物の見た目、食べ物、歯の形状の違い、という3つの観点から、子供たちに動物の仲間分けを行ってもらい、その後、展示室にて4種類の動物の骨の特徴について解説を加えながら再び観察していく、という流れで行った。（詳しくは図1を参照いただきたい）

3. WSのねらい

では、今回行ったWSのねらいについて具体的に挙げていきたい。本WSのねらいは、主に次の3点に集約される。

- ①企画展示について、楽しみながら学ぶ
- ②課題探求能力、問題解決能力（博物館でのリテラシー）を涵養する

③“観察、推理、議論、確かめ”というプロセスにより、学問的探求の面白さを知ってもらう

①については、グループで展示見学を行った際、「展示内容が大人向けのため、子どもは興味を持ちにくいのではないか」、「動物の骨のみしか展示されていないため、その骨がどんな動物のものなのか想像し難いのではないか」、「展示されている動物どうしの関係が分かり難いのではないか」という意見が出た。これらの意見をもとに、“子どもたちに企画展を楽しんでもらう”、“動物に対して興味を持ちながら学んでもらう”ということを目的とし、動物カードを用いたゲーム形式のWSを企画することに決定した。

②については、見た目、食べ物、骨という3つの観点でくり返し動物を分類していくことで、多角的な視点からモノを見ること、疑問を持ち考えることを体感できると思い、WSの内容を考えた。これは課題探求、問題解決の能力の向上につながり、この展示をみることに留まらない、博物館において主体的にモノと関わっていける、リテラシーを涵養することにつながるのではないかと考える。

③については、自分たちの手で動物を仲間分けしていくことにより、これまで主に研究者が行ってきた、生物の“分類”の追体験を行うことを可能にする。さらに「なぜこの仲間分けにしたのか」ということを考え、グループ同士で意見交換することで、探求していくことの楽しさ・面白さを感じることができる。また、グループ対抗戦という形を取り、相手チームに自分たちが行った分類の理由を説明する時間を設けることで、根拠に基づいた言葉で伝えること、相手に納得してもらうことの重要性を体験できると考えられる。

4. WSの実践

当日の様子

WSは、2012年9月1日（土）、13時～14時、14時半～15時半の2回、各回1時間ずつで実施した。参加対象は小中学生としていたが、参加者は各回とも全員小学生で、1回目に6名（男子2名、女子4名）、2回目に5名（男子5名）という内訳となった。各回とも参加者を2つのグループにわけ、チーム対抗戦という形でカードゲームを進行した。WSの進行

にあたっては、司会・ファシリテーターに1名、現場サポートと展示室での解説に1名（2回目は2名）というスタッフの配陣で行った。また当日は1階ロビーで週末子ども博物館が開催されており、そこでスタッフをしていた大学院生の方たちも子どもたちに混じってWSに参加してもらえたため、子どもと大人と一緒にワークしていくとても活発な場となった。

WSの実践経験の少ない私たちにとっては、子供たちが実際どのような反応をするのか未知であり不安も大きかったが、参加してくれた子どもたちは終始元気に楽しそうにワークに取り組んでおり、観察や話し合いも非常に活発に生まれていた。私たちスタッフの仕切りのテンポやファシリテーション技術など、反省する点や磨きたい点は多々あったが、子供たちがワクワクしながら動物を仲間分けしている様子を見て、本当に楽しくWSを行うことができた。

仲間分けの途中、「歩き方の違いについても考えられそう！」という意見が出ており、新たな分類の観点が子どもたちのなかで生まれていた。多角的な視点から動物を観察していくことで、主体的に探求していく姿勢が生じたということが言えそう。また、“動物の見た目”、“食べ物”、“歯の違い”という観点が段々と加わっていくことで、子どもたちはその都度グループ内で活発なコミュニケーションを行いながら推理を練り直し、「食べているものが違うけど歯は似ている」「僕たちと同じで何でも食べるから、見た目は違うけど、こっちはじゃない？」というように、多角的な視点から複合的に思考し、根拠を固めていた。これらのことから、今回行った3段階の思考ステップは、動物について様々な角度から観察して考えていくことをうまく誘発するとともに、モノと対峙することでの柔軟な思考方法、探求能力を養うことにおいて、非常に有効であったと考えられる。このように、実践においてWSのねらいが達成されることが明らかになった。

アンケート結果の考察

つぎに、WS終了後に答えてもらったアンケート結果（表1）を簡単にふりかえってきたい。【1、今日のイベント「動物を仲間分けしてみよう！」はどうでしたか？】の質問には、全員が「とても楽しかった」「楽しかった」と回答しており、本WSのねらいで示した「①企画展示について、楽

しみながら学ぶ」は、ほぼ達成されたと言える。続いて、【2、以前から動物に興味がありましたか？】の質問には、「以前から興味はあった」と答えた人が8人、「どちらとも言えない」「あまり興味はなかった」と答えた人がそれぞれ1人であったが、【3、今日のイベントで動物への興味が増えましたか？】の質問には、全員が「前よりも動物への興味が増えた」と答えていた。このWSの1つの成果として、子どもたちの動物への興味向上ということが言えそうだ。

また自由記述の感想欄には、「仲間わけをするのが楽しかった」「動物カードで、うらの骨を見て、歯にも興味を持ってました。今度は、は虫類、両生類などのことをしてほしい」という回答があり、WSに参加することで、動物や分類することに対する関心がさらに高まったことが分かる。この関心が今後継続的に次の活動に繋がるかどうかまでは分からないが、WSのねらいで挙げていた動物や探求への関心や興味のきっかけを引き出すことができたと思われる。

反省点

さいごに今回のワークショップでの反省として、広報と記録についての反省を述べたい。まず広報に関しては、立案から実施までの日が短く、ワークショップ参加者の募集案内を、博物館の受付と博物館HP掲載という限られた場所でしか行えなかった。WS参加予約の人数も少なかつたため、当日博物館に来ていた子どもたちに直接声かけを行い参加してもらったケースもあった。つまり今回WSに参加してくれた子どもたちは、少なからず博物館に興味がある子どもたちばかりだったということだ。広報していく際には、博物館が有する近隣の小学校へのネットワークを生かすなど、幅広いターゲットに向けた告知と募集を行える工夫をする必要があったと反省している。

次に記録に関しては、当日の様子を一切記録（映像、写真、音声などにおいて）することなく終えてしまった。（現場に訪れた大野先生により、現場の様子は写真で数枚残っていた。）本WSは博物館における教育活動であるが、そこで起こる学びの内実は、WSの設計シナリオとアンケートとスタッフの感想だけで語れるものでは決してない。当日参加した子どもたちの表情や目線、一人一人の発話、グループ内で起こる議論、ファシリテーターの言動やふるまい、私たちを含めた参加者同士のコミュニ